

## 【コメント】

著者	田中 俊明
雑誌名	東アジアの都市形態と文明史
巻	21
ページ	92-94
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00002882">http://doi.org/10.15055/00002882</a>

## 【コメント】

田中 俊明

わたしは、高句麗長安城（後期平壤城）について、すでに、

「高句麗長安城の位置と遷都の有無」(『史林』67巻4号、1984年)

「高句麗長安城城壁石刻の基礎的研究」(『史林』68巻4号、1985年)

「朝鮮三国の都城制と東アジア」(『古代の日本と東アジア』小学館、1991年)

「後期の王都」(『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、1995年)

などに発表してきている。ここでのコメントも、そこに述べたことを基礎にしているので、詳細はそれらを参照していただきたい。

(1)平壤城（長安城）の都市形態を考える上で極めて重要な平面構造について、学界で議論が分かれている。20世紀まで残っていた城壁による4つの区分、北城・内城・中城・外城（図1参照）が、そのまま高句麗までさかのぼるのか、それとも中城・外城は一体のものとして、3つの区分のみであったのか、という問題である。それはすなわち、4区分の中城と外城とを分ける城壁（図1のF）が、いつ築造されたか、という問題に帰着する。発表者は、4区分に賛意を表明しているが、わたしはそれに疑問をもっている。

Fの城壁を、高麗時代の初築であると考えたのは関野貞であった。高句麗時代の築造ではないとする根拠について「先年此城壁の下から非常に立派な礎石が二個発見されましたが、形式上確に高句麗時代のものであります。それですから此城壁は高句麗おり後に造つたものに違ひない」とする。それは正陽門址附近出土の礎石を指す。それを前提にして、文献を整理し、高麗時代に広い外城を切りすてるために築造した、とみたのであった。北朝鮮でも最初は関野説が受け入れられていたが、崔義林が高句麗説を提示した。その論拠は、①Fに正陽門と含毬門という2つの門があるが、高句麗時代からの大路（9畝路）がここを通っている。「もし中城が高麗時代にはじめて造られた城壁ならばどうして高句麗の9畝路の通じる道の上に」2門を建てようか、②その正陽門址から大きな礎石が発見されており、それは「高句麗時代の城門址であったことを証明」する、③高句麗時代にその正陽門まで運河が通じていた、④中城壁を造った形式と方法が、「内城壁と外城壁を造った形式と、城石の形態、治石手法から石材と、城壁の基礎などに至るまで全く同じである」、という4点である。しかしこれらについては、①大路が高句麗時代からのものであることは正しいが、そこにある門が同時代の築造である必要はない。後代に城壁を造る場合でも、門は既にある道路の上に造るはずである。②関野の高句麗築造否定の論拠のひとつである。発見地点について、関野は「城壁の下から」あるいは「正陽門址附近」とするが、崔義林は「正陽門址から」とする。崔義林は何にもとづいて改めたのか、またどうして門の礎石とわかるのか説明がない。③運河があったことと城壁とは結びつかない。④城壁全体が、後代に修築が繰り返しおこなわれている。そもそも城壁自体の年代がわかるのであれば、このような議論は必要ない。と、このように批判することができる。しかも、条坊の痕跡は、Fの城壁を越えて北側におよんでいる。Fの城壁が、高句麗時代にはなかったことを示すものといえよう。

以上のような点から、わたしは、高句麗時代には3区分であったと考えている。平面構造は、重要であるだけに、4区分とみる特別な理由があるのであれば、それを明らかにしていただきたい。

(2) 築造の経緯については、わたしがすでに提示した考え、すなわち

552年 築造事業の開始

566年 内城の築造開始

586年 遷都

589年 外城の築造開始

593年 北城の築造を経て完工 を、基本的に採用していただいている（関徳植「高句麗平壤城の築城過程に関する研究」『国史館論叢』39、1992年。「高句麗の平壤城刻字城石に関する研究」『韓国上古史学報』13号、1993年）。ただ、552年から、宮闕が築造されはじめている、という点は、わたしの理解と異なる。この問題は、直接的な史料がないため、決着をつけにくい。566年以前に宮闕、566年からまもなく内城が完成した、ということであれば、586年まで遷都が遅れた理由はどこにあるのであろうか。意見があれば、おうかがいしたい。

(3) 前期平壤城について、特に平地の王宮として安鶴宮址を想定している点であるが、これは高句麗都城制の体系的理解にとって重要である。安鶴宮址出土の瓦当について、日本における最近の研究は、高麗時代に、高句麗の瓦当にならったものを造った、という高麗時代説が有力になっている。また、安鶴宮址宮殿遺構の下層には、破壊された古墳（横穴式石室墳）がある。地表下二〇〇cmに第一文化層があり、その上の地表下四〇cmより以下の第二文化層が宮殿層である。第一文化層に古墳があり、安鶴宮はほんらいその地にあった古墳群を破壊して、その上に造営したものであった。紹介されているのは安鶴宮一号墳から三号墳である（図2）。問題はその年代であるが、北朝鮮では出土した土器・五銖銭などから、三世紀前半以前の古墳としている。しかし、それは大いに問題であり、このような石室構造は五世紀後半から六世紀前半にかけてようやくみられるものである。そこまでくだらせて考えるべきものであろう。とすれば、その上層の宮殿遺構は、早くとも六世紀以後の造営とみなければならない。土器の年代もあわせて検討する必要があるが、それより早いことは考えにくい。わたしは、高麗文宗代の左右宮の左宮（右宮は、珠宮として平壤市街の西北で古くから知られている）ではないかと考えている。

もし安鶴宮が高麗時代の宮殿建物であるとすれば、それを中心に坊里制が敷かれていたとしても、高句麗のものではない、というべきである。しかも、これまで現実に紹介されている道路・建物は、きわめて一部分にすぎず、全体に広がる坊里制が想定できるかどうか、疑問である。この問題について、どのように考えるか教えていただきたい。

(4) 条坊の区画について、諸氏の意見を紹介するのみで、評価をくだされていないが、意見があれば開陳してほしい。わたしも確かに「発掘調査を中心にした広範囲な調査が必要である」と考えるが、現実にそれがのぞめるかどうか、発掘はかなり困難であろう。ただし、これまでの研究が、「箕田図」にとらわれている点がある。1929年の平壤地図と対比すれば、正陽門を通る南北路と含毬門を通る南北路とのあいだには、中路は2本しかない。「箕田図」（図3）は3本、描いている。そうした点にも留意して、より精密な計測が可能であれば、より有効な推論も提示することができるであろう。

（滋賀県立大学人間文化学部）

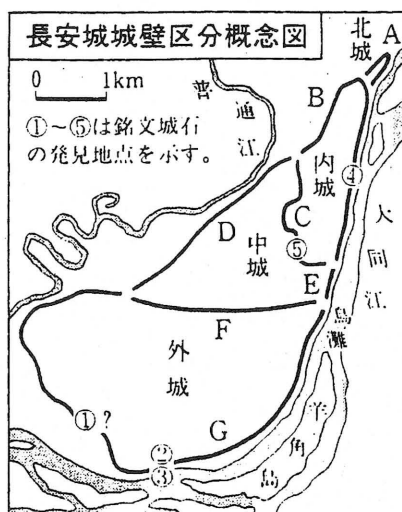


図1 (東潮・田中俊明編著『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社, 1995より)

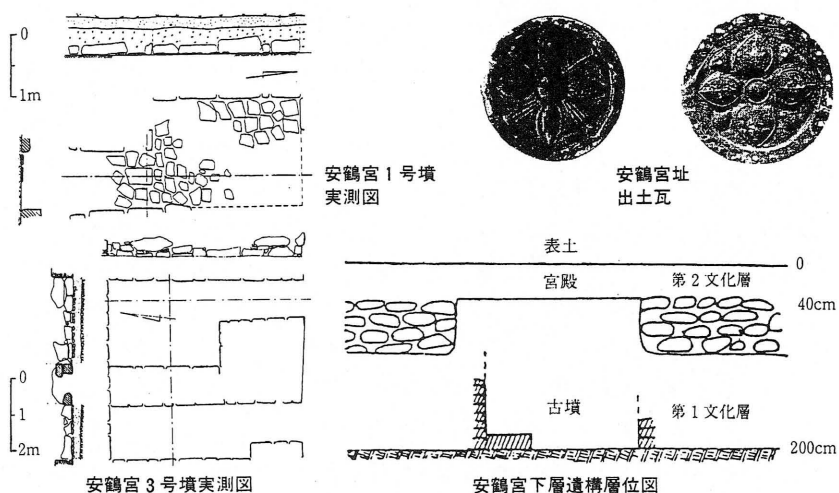


図2 (同上書より)

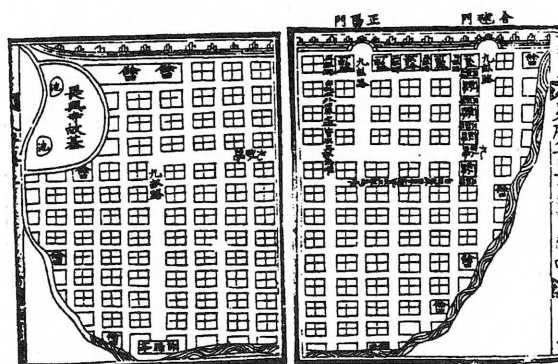


図3 韓百謙の「箕田図」